

ビルを見て泣いた中年

湯原昌泰

僕が東京荒野という季刊誌を作ろうと思い立ったのは2014年の秋。11年前のちょうど今頃だった。

その頃僕はギター一本の弾き語りライブをやっており、高円寺や下北沢のライブハウス、吉祥寺の路上などで自作の歌を歌っていた。

歌もギターも下手だったが声の大きさだけには自信があった。その証拠か路上ライブをやって警官に止められなかつたことはほぼなく、近くで歌っていたミュージシャンに、「もう少し小さな声でやってもらえませんか」と言わされたことも二度や三度ではなかつた。

一度吉祥寺駅で歌っていた時、止めた警官が高校時代の同級生で、同じ茨城出身同士、東京でやっているんだなあと注意されながらも嬉しく思ったことがあった。別日だが、その日も吉祥寺で歌っていたところを職務質問され、問い合わせられている僕を見て、「吉祥寺から歌がなくなったらおしまいだよ！」と通りすがりのおばちゃんが言ってくれたことも懐かしい。

東京に上京してきたのは21歳の夏だった。太宰治の墓が三鷹にあったから、宮本浩次や町田康、怒髪天などが武蔵野について歌詞や文章に書いていたからという理由で三鷹に住もうと思ったが、家賃の折り合いがつかず、西武新宿線沿線の東伏見という駅に住んだ。コープとマックしかないその町に住んだのは、高校時代から組んでいたバンドを本格的にやりたかったからだった。東京での初ライブは今はなき西荻窪watts。その日の共演者の中には抒情詩の惑星に執筆いただいているTASKEさんの姿もあった。

2014年頃の僕の物販にCDではなく、その代わりにA4用紙に印刷した自作の文章を1つ100円で売っていた。それをどこかで買ってくれたという人と後日高円寺で共演し、「湯原さんが書いた文章、俺がバイトに行ってる間に彼女が読んで捨てちゃったんですよね」と言われたことがあった。「ああ、それが正しいと思います」と間抜けたように返したが、

感想もなくただ捨てたことだけを伝えられた僕は勿論しつかり傷ついた。

当時のことを思い出すのは難しいが、CDも作らず、されどコピー原稿だけは売っていたことを考えれば、それなりに切羽詰まっていたんだろう。雑誌を作ろうと思いついたのは原稿を捨てたと言われてからすぐのことだった。僕は一度、朝日を浴びて立つビルを見て泣いたことがある。立派だったからだった。折れそうもなかったからだった。直角はあまりに意志であり、硬さはそのまま正義だった。つまり僕は確固たる物体をこの世に作り出したかった。あの頃、東京はただ荒野だった。

湯原昌泰…1984年生まれ。茨城県出身、東京都在住。自分の作品を発表する場がなかったことから2015年、季刊誌東京荒野を発行。抒情詩の惑星管理人。

東京荒野 <https://www.tokyokouya.com/>

抒情詩の惑星 <https://poetry2021.webnode.jp/>